Asahimachi Museum,Niigata University Newsletter No.16 2018.6

あさひまち

新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター　第16号　2018年6月　ISSN 2185-7431

ご挨拶

新潟大学旭町学術資料展示館長　郷　晃

今年度2月より、前任の橋本博文先生から館長を受け継ぎました。私の旭町展示館との最初の関わりは、展示館がオープンする当時、委員をされていた近藤フジエ教授（芸術学、美術史）から、教育学部の美術系として何を大学博物館に求めるのか？という問いかけでした。そこで美術系としては、企画展が可能なフレキシブルな空間が一つはあって欲しいとお願いを出した記憶があります。

芸術系の希望を反映していただいて様々な展示が入れ替わる空間が現在でも維持され、活動が行われています。私自身も2004年に長野県松本市でお世話になっていた現代美術のギャラリーで彫刻の個展を行ないましたが、翌年の春、その時のいくつかの作品を構成して展示館で個展を開催したことがあります。

旭町展示館は、博物館としては、まだ未成熟なため展示館という名称にあまんじている状態です。限られた物理的空間であるため仕方がないことでありますが、今のところ常設展示空間イコール収蔵庫のような状態となっています。本来は、展示空間と同等以上の収蔵庫としてのキャパシティと収蔵品があり、様々な企画によって収蔵品を展示構成できるようになって、初めて博物館として認められるようです。

かつてスウェーデンの現代美術家集団（アート・マイナーズ）の展覧会を、旭町展示館と西大畑地区の文化施設（砂丘館、安吾 風の館、齋藤家別邸、北方文化博物館新潟分館）との合同で開催する運びとなり、私もお手伝いをさせていただいたことがありました。これらの文化施設は、純粋な日本の伝統的建築空間と庭園があります。その環境に日本とは全く異なる世界で育まれてきたスウェーデンの現代美術の作品が展示されることになり、スウェーデンの現代美術家の作品と日本の伝統文化のコラボレーションという、大変興味深い企画となりました。新潟に来られるスウェーデンの作家さんたちもそれをとても楽しみにしておられたようです。しかしここで一つ問題がありました。旭町展示館は他の文化施設とは異なり、洋館建築のため展覧会の本来のテーマから、外れることでした。そこでアート・マイナーズの作家さんたちは、ディスカッションを行い、皆でアイデアを出し合って問題解決に至りました。

旭町展示館の企画展示室は、作家の方々が、小作品を持ち寄ってグループ展としての会場構成になりました。そして展示館の玄関前には、アート・マイナーズ（炭鉱夫の意、芸術の探求者）のコンセプトを示すため大学内で使っているスコップをかき集めて銀色に着色を施し、それらをインスタレーション（台座の無い彫刻の意）しました。私のゼミの学生も彫刻室の粘土層のスコップを持ってきて、銀色スプレーで着色するサポートをしていました。このあと、現在も銀色のスコップは彫刻室で使っています。

いっぽう、西大畑地区の文化施設における展覧会は、日本の伝統的建築意匠が施された空間と、スウェーデンの現代美術家の前衛作品との実験的コラボレーションとなりました。風情ある日本独特の空気感の中に全く性格の異なる海外芸術家の現代作品が、拮抗することなくお互いに融合しながら不思議なハーモニーを漂わせていたと記憶しています。展示された前衛的現代作品によって、伝統的な日本の建築空間の見え方がこれまでとは異なる新鮮なものでした。そして当時の建築を依頼したクライアントと、大工、左官、庭師といった日本の制作集団の仕事のクォリティの高さを再認識したものであります。

この時の企画で、旭町展示館は、この展覧会のインフォメーションセンターのような役割を果たしていたと感じています。展示館のこの地区における存在の意義を確認しました。これは、展示館にとって一つの方向性を発信できた企画であったと記憶しています。

前任の橋本博文先生とは、かなり異なるスタンスの人間ではありますが、どうかよろしくお願いいたします。

企画展示

小片 保回顧展および記念講演会

開催期間:2017年10月4日(水)～2017年11月12日(日)

人文学部　橋本　博文

小片 保先生の生誕百周年を記念して準備されていた展示会が1年遅れで実現しました。展示資料は、本学医学部で管理している小片コレクションと称される古人骨標本群と小片家からお借りした資料の大きく2つから成ります。展示構成は、①日本人頭蓋骨の変遷、②骨・歯から分かること、③即身仏の調査・研究、④小片家の床の間の再現、⑤小片先生の俳句作品、⑥小片先生のポートレート写真で辿る生涯、⑦アンデス・エジプト調査、⑧小片先生の著作および追悼文等です。

講演会当日には早稲田大学考古学研究室と同大学エジプト調査室から祝電を頂戴しました。それは小片先生が亡くなる直前まで参加していたエジプトのマルカタ遺跡の調査に帯同した関係者からいただいたものです。

記念講演会には小片先生と同郷の群馬県出身、髙橋姿学長が最初に挨拶に立たれ、専門の耳鼻科の立場から縄文人の外耳道骨腫を今様なサーファーズイヤーとして紹介されました。次いで当時医学部長だった牛木辰男先生が、小片先生に指導を受けた最後の医学生という立場から、小片先生の偉大な教師としての側面について語られました。続いて山内春夫新潟大学名誉教授に医学部陸上部と俳句部の顧問として小片先生から受け継いだお仕事を披露していただきました。さらに、長崎大学名誉教授の加藤克知先生から「最後の弟子から見た小片 保先生の人類学研究とおもいで」と題して小片先生の学問への業績を①縄文人骨を中心とする日本人形質の時代的変遷、②日本列島旧石器時代人骨の研究、③日本の入定、即身仏ミイラの研究、④アンデス人骨とミイラ、⑤エジプト人骨とミイラの5つに整理してくださいました。最後に、小片先生のご長男であられる小片 守鹿児島大学大学院教授から、ご父君の小片 保先生の「父親」としての人間味溢れる側面を家族を代表して“暴露”していただきました。他に類のない心温まる講演会となりました。

展示と講演会の概要は、小片コレクションの管理に心血を注いでこられた熊木克治新潟大学名誉教授の「小片コレクションとともに」の玉稿を加えて『小片 保回顧展―その人と業績―』に記録集としてまとめました。併せて記念講演会の様子をビデオ撮影し編集した後、DVDに収録しました。それについては、旭町展示館友の会会員、渡辺知夫さんと土屋藤夫さんの協力をあおぎました。

企画展示

放散虫とかたち

開催期間:2017年7月12日(水)～8月31日(木)

糸魚川フォッサマグナミュージアム　茨木　洋介

平成29（2017）年7月12日（水）から8月31日（木）に、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて、企画展示「放散虫とかたち」を開催しました。海生プランクトンである放散虫の持つケイ酸質の殻の多様な形の世界に触れ、より多くの人に放散虫のことを知っていただくことを目的としました。

会期中に、展示会場の「ときめいと」、新潟大学サイエンスミュージアム、同旭町展示館、理学部附属臨海実験所、新潟県立自然科学館、県内外のジオパークの拠点施設である佐渡市の佐渡博物館、津南町の農と縄文の体験実習館「なじょもん」、長野県栄村の歴史文化館「こらっせ」、糸魚川市のフォッサマグナミュージアムを結ぶスタンプラリーを実施しました。

展示会場には、化石と現生の放散虫の顕微鏡写真や、3Dプリンタで製作した拡大模型を展示しました。また、平成28年に糸魚川で発見された新潟県最古の化石であるシルル紀放散虫フトバリ・モリシタイの拡大模型を天井から吊り下げ、パネルを用いて解説しました。さらに、来場者が見るだけでなく体験もできるように、地質ぬりえや、放散虫に似た星型の折り紙を作るコーナーも設けました。

8月5日（土）と8月19日（土）には、会場内で来場者向けの展示解説「ふれあいトーク」を実施しました。筆者が担当した8月19日には、まず糸魚川のヒスイや化石など持参した石について解説し、続いて新潟県最古の放散虫化石を紹介しました。参加者からいくつかの質問を受け、丁寧に答えました。

8月19日のふれあいトーク

この展示は、第15回国際放散虫研究集会の会期に合わせて、10月22日～27日にも新大Weekの催し物として展開され、海外の放散虫研究者にも見学していただきました。

企画展示

戦争と子どもの表現

開催期間:2017年8月25日(金)～9月17日(日)

下川手集落の教育文化
～子どもたちの絵と書が拓く地域力～

開催期間:2018年3月1日(木)～3月10日(土)

教育学部　柳沼　宏寿

本企画展では、十日町市松之山地区の下川手集落に保存されている大正10年から昭和27年にかけての地域の子ども達が制作した作品（絵画、書、作文など約3,000点）の中から選定して2回に渡り紹介しました。これらの作品は、当時尋常小学校高等科2年（現在の中学2年）までの子どもたちによって組織されていた下川手小年団が、地域の教育力向上を目指して自主的に実践していたものです。絵画や書、綴り方などの作品制作を呼びかけ、それを集約したものを束ね、学校の先生から朱書きの評価をもらった上で各家庭へ回覧していました。この時代、30年もの期間に渡り子どもの書画が（学校ではなく地域に）保管されている例は全国的に見ても珍しいものです。絵の図柄や書の主題からは戦前から戦後へかけての時代背景や地域文化の様子、そして教育の有り様が伝わってきます。

今回は、まず8月の「戦争と子どもの表現」展で、戦争をテーマにした作品をピックアップし展示しました。構成としては、書画をパネルで26点、資料現物として書画の他に作文（慰問文）など10数点、さらにポーランドの『子どもの目に映った戦争』9点を並置しました。ポーランドの子どもたちの絵には、突然ナチスが自宅に踏み込んできたり収容所へ連行される途中で親戚や友人が射殺されていたりと、まさに「目に映った」情景が描かれているのに対し、日本の絵は、自分たちの代わりに戦地へ赴いている兵士への感謝や激励といった、いわば「銃後の思い」が込められたもので、描かれている情景は、実際に見たものではなく主として情報に基づいたものです。ポーランドと日本を比較しながら戦争と教育の関わりについて考えることができるような演出を試みました。また、3月の「下川手集落の教育文化」展では、資料の全体像がわかるように時代ごとに作品を選んで展示しました。　内容は、絵画22点、書5点、資料現物10点、その他（調査の経緯等）でした。

本資料は10年ほど前から美術教育の史的遺産として調査とデータベースの整理を継続し、これまで3回のフォーラムと４回の展覧会を行なってきており、本企画を含めると展覧会は通算6回となります。特に、8月の企画からは今後グローバルな視野で発信する可能性を見出すことができて大変有意義でした。できれば今後も旭町での展示を継続しながら本資料の調査研究を発展させていきたいと考えています。

旭町学術資料展示館の歴史を振り返って

人文学部　橋本　博文

1999年6月1日、本学が新制大学として創立50周年を迎えることになりました。その折、記念行事を各部局から募りました。そこで私たちは本学に大学博物館がないことを意識し、各部局に眠る貴重学術資料を一堂に会して公開展示会を開催することを提案しました。その提案は当時の執行部に受け入れられ、採択されました。公開展示会では8日間で学内外から約2,000人の見学者がありました。その際のアンケートで、市民から是非常設展示して欲しいという要望をいただきました。それを受けて、本学では展示スペースの確保を目指したところ、折り良く旭町キャンパスにある現展示館の建物に入っていた放送大学新潟センターが他所に移転となり、建物が本学に返還されました。そこで、大学に現存する最古の建物での利用がスタートすることになりました。始めは「展示室」の名称で、その後「展示館」と改称しました。当初、開設支度金はほとんどなく、2階の企画展示室の一部の窓をつぶしてベニヤを張り、その上にクロスを貼って体裁を整えました。展示ケースを購入する予算がなく、各部局で廃棄されゴミ捨て場に捨てられていたものを拾い集めて並べました。それでも足りず、県内のある市町村で廃棄処分となったケースをまとめてもらってきたこともありました。恥ずかしながら現在もその半数近くを使用しています。

思い出深いのは、開設間もなく行った佐渡との交換展示会、県民会館で開催した開館十周年の貴重学術資料公開展示会、周辺館園と連携して実施したスウェーデンの現代アートの展示会、その返礼として実現したスウェーデンのウプサラ大学のリンネの温室で開いた『花見展』などがあげられます。また、佐渡金銀山の世界遺産登録運動や新潟市の市民プロジェクトへの参加なども忘れられません。その他、キャンパスマップの製作や「横浜のひと」・「澤田敬義像」・「竹山 屯像」の彫像3点の寄贈受け入れに関われたのも幸せでした。

初代館長の芳井研一先生から引き継ぎ、これまで14年間、大過なく展示館を運営してこられたのは、理解を示してくれた大学執行部、専門的知識・技能を提供してくださった各部局の運営委員の先生方、無理難題を聞き入れて協力してくださった代々の事務方、特に田所浩記さん、阿部 誠さん、清水美和さんのお陰です。そして、私の考古学研究室の前任者、故甘粕 健先生のファンを母体とする市民ボランティア組織、あさひまち友の会のメンバーの方々には家族のように日々支えられてきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

今後、郷 晃新館長のもとに、結束して建物の老朽化の問題や収蔵庫不足の解消、入館者増に取り組んで欲しいと思います。

橋本館長と私　その１

橋本先生との出会い
ー考古学・文新協・あさひまち友の会ー

旭町学術資料展示館　あさひまち友の会　西田　静夫

1996年4月16日、私は40数年の会社生活に別れを告げ満60歳で定年退職しました。リタイヤ後はかねてから興味と関心をもっていた「考古学」を学んでみたいと思っていたので、これを機に、2年程前から準備していた新潟大学人文学部に科目等履修生として入学しました。

選んだ科目は橋本博文先生が担当する「日本文化起源論（考古学）」で4月16日に初登校し、この日が第2の人生のスタートとなりました。以降2002年度までの7年間、毎年4月に受講の手続きを更新しながら、考古学に関する学習を続けることができました。

通学は週1回の講義のみですが、1年目の考古学実習では遺跡発掘調査も体験しました。

入学したその年の8月に文化財保存新潟県協議会（文新協）が設立・発足し、参加することになりました。発足時の会長は甘粕健先生で副会長は橋本先生でした。

このような動きのなかで、2001年12月に新潟大学旭町学術資料展示室（後に展示館）が開館しました。開館までには大学側の世話人として橋本先生が精力的にあたられたと聞いております。

その後、2003年3月にあさひまち友の会が結成・発足し、現在に至っています。発足時は20人の会員でしたが現在は約2倍の41名となっています。友の会の発足にあたっては文新協の会員数名も参加し、事前打合せ会が数回開かれ、私も参加しましたが、設立主旨や会則づくりには橋本先生の御教示やアドバイスを多くいただき、ようやく第1回総会の日（2003年3月26日）を迎えることができたことが懐かしく思い出されます。

日本文化起源論の講義のなかで古墳時代の銅鏡に特異な文様をもつ鏡（**家屋文鏡**）があることを学び、建築に関係した仕事に長年携わっていた者としては強く印象に残りました。

この家屋文鏡は考古学だけでなく、建築史や美術史の分野でも極めて著名であることも知りました。鏡に描かれた四棟の建物は古墳時代の**豪族居館**を構成する建物群ではないかといわれていますが、単に建物の構造や様式だけでなく、古墳時代の社会構造や描かれている樹木や鳥から神仙思想などとの関連も指摘されています。

橋本先生が研究テーマとされている「古墳時代の豪族居館」に関連した企画展「弥生時代環濠集落から古墳時代豪族居館へ」が今秋、新潟市新津美術館市民ギャラリーで開催される予定です。友の会の一員としてもできるかぎりの協力をして、盛り上げていきたいと思っています。

橋本館長と私　その２

橋本先生と牡丹山諏訪神社古墳の発見

旭町学術資料展示館　あさひまち友の会　小林　隆幸

2013年8月9日、新潟日報朝刊の1面に、「新潟東区で古墳確認　本県初の円筒埴輪発見」「歴史書き換える」と、大きく報じられました。その前日、橋本先生から私に電話が入りました。「牡丹山で埴輪を拾いました。明日、日報に載ると思います。そちらにも記者から問い合わせが行くかもしれません」。ついに来たかと、鼓動が高鳴ったことを今でも憶えています。

2011年に金塚友之亟氏の関連資料一式が、ご遺族から私の勤務先のみなとぴあに寄贈されました（①）。その中に「牡丹山」と注記された埴輪らしい土器片を発見し（②）、それを半信半疑で12年12月から開催のみなとぴあ活動展示「みせる」で展示紹介しました（③）。半信半疑だったのは、それまで新潟県内の埴輪は、橋本先生が発掘した飯綱山10号墳の壺形埴輪だけで、むしろ新潟県には埴輪はないことが当たり前になっており、私自身、埴輪にお目にかかったことはほとんどなかったからです。そして橋本先生に、その展示を見ていただきました。「埴輪でいいですか？」との問いに、先生は少し笑みを浮かべながら「埴輪ですよ」とお答えになり、その後、多くは語らなかったように記憶しています。注記にあった「牡丹山」という地名は新潟市東区にありますが、当時、ここに古墳があるとは想像がつきませんでした。

この埴輪片のことを気にかけていてくれていた橋本先生は、新聞報道される4日前の8月5日、ついに牡丹山諏訪神社で埴輪を採取されたのです（④）。その後の古墳の調査成果は目覚ましく、発見に至る経緯は、今では懐かしい思い出になりました。

①

②

③

④

絵:吉田和菜

企画展示

企画展示　「糸と装飾展」

2017年12月16日(土)～2018年1月13日(土)

新潟大学大学院 教育学研究科(美術科)修了　嘉藤　稜子

日常の中で、糸に触れる機会はどのくらいでしょうか？

私は、教育学部芸術環境講座において絵画表現や地域アートプロジェクトを行う中で、生活を彩る布、糸を用いた装飾を制作の柱として制作を続けてきました。

私が初めて糸に触れたのは、まだ家庭科の授業で裁縫を習う前の小学校２年生の頃でした。母から並縫いやボタン付け、簡単な刺繍のステッチを教えてもらい、小さな小物入れやマスコットを作りました。生活の中で使うものを繕い、また新しく自由に作る、それが今では編み・結びレースや刺繍表現にも繋がっています。

今回、展覧会に用いた「装飾」というテーマは、模様モチーフとしての装飾、布を彩る糸を表す装飾、生活空間を飾る装飾としても、展示空間全体を意識して用いました。ご来場いただいた方からは、「布への絵画表現から、レース編みや刺繍などの糸による小さな模様表現が、絵画のような作品として形になっているのが面白い」、「糸の柔らかさと直線的な緊張感の両者が調和していて、作品として目にする機会の少ない素材の良さが見られた」など、ほかにもたくさんのご感想を頂きました。

6年間学んだ集大成の年に、大学の展示館にて企画展を開催させていただけたこと、たくさんのご来場者の方々から、あたたかいお言葉を頂けたこと、とても感謝しています。また美術だけでなく、服飾店を営む方や、編み物をされる方、普段展覧会に足を運ぶ機会の少ない方にも興味を持っていただける展示とできたことを、とても嬉しく思います。

日々変化する社会の中で、変わらずささやかにもやわらかく、生活に寄り添い彩る素材や手法の存在を考える機会としていただければ幸いです。

企画展示

「学校町界隈放課後マチあるき特別写真展」を振り返って

開催期間:2018年3月16日(金)～3月30日(金)

経済学部経済学科3年　金子　千夏

2018年3月の中旬から約2週間「学校町界隈放課後マチあるき特別写真展」を旭町学術資料展示館で開催しました。

「学校町放課後マチあるき」というのは、2017年7月に旭町にほど近い学校町周辺で行ったまちあるきのイベントで、学生や一般の方をつのり、学校町の歴史や昔の話をガイドの方に聞きながら、まちの様子を写真におさめるというものです。新潟大学キャリアセンターで行われている、企業に長期インターンシップを行う活動の成果としてこの企画を開催させていただきました。まちあるき当日のルートにも旭町展示館をいれさせていただいて展示館の方に中を案内していただき、参加者の方が興味深い話に耳を傾ける場面もありました。

そして開催期間中はたくさんの方にこの写真展へ訪れていただきました。展示された写真の多くは学校町の何気ない風景を映したもので、訪れてくださった方々は懐かしい風景や今まで見えてこなかった景色を感じた方もいらっしゃったのではないでしょうか。何気ないまちの中に小さな魅力を見つけることができれば、さらにこのまち、そして新潟のことを好きになるのではないかと感じています。

この写真展を行うにあたり、旭町展示館の皆様や博進堂の方をはじめ、たくさんの方にご尽力いただきました。特に旭町展示館にとっては初の学生の持ち込み企画であったこともあり、いろいろな配慮をしていただきました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。有難うございました。

平成29年度　あさひまち展示館 活動記録

●あさひまち展示館企画展示

期　　間	タイトル	展示室	担　当
2017.4.6～4.23	展示館でお花見を	企画展示室	展示館
2017.4.28～5.28	"植物標本のタネは地域の自然を救う!?時を越えて発芽する　植物標本のタネ"	企画展示室	教育学部
2017.6.14～8.6	戦争を考える 2017	企画展示室	人文学部
2017.6.14～8.6	陵墓を考える	企画展示室	人文学部
2017.8.25～9.17	下川手集落の教育文化～子どもたちの絵と書が拓く地域力～特別企画　戦争と子どもの表現	企画展示室	教育学部
2017.9.22～10.29	佐渡の思い出－地学実験A・B実習発表展－	1 F展示室	理学部
2017.10.4～11.12	小片 保回顧展－その人と業績－	企画展示室	医学部・人文学部
2017.11.17～12.10	村の広がり・私の奥行き　2017「村の肖像」展Ⅳ	企画展示室	人文学部
2017.12.16～2018.1.13	糸と装飾展	企画展示室	教育学部
2018.1.17～2.4	槁本 学のDesign work展	企画展示室	教育学部
2018.2.8～2.22	小脇の風景展	企画展示室	教育学部
2018.2.21～3.31	めでたい形－子どもの成長を育む郷土玩具－	2階ロビー	教育学部
2018.3.16～3.30	学校町界隈　放課後マチあるき特別写真展	企画展示室	教育学部

●あさひまち展示館　サテライト・ミュージアム駅南キャンパス「ときめいと」企画展示

期　　間	タイトル	担　当
2017. 7. 12～8. 31	放散虫とかたち展	理学部

●資料受入リスト

資料名	説　明	備　考
横浜のひと	彫刻ブロンズ像	2017.12.25寄贈

●フォーラム・講演会

日　　時	タイトル	講　師	会　場
2017. 6. 3	第15回新潟大学あさひまち展示館友の会総会 記念講演会「戦争の時代の経験と歴史資料」	中村元人文学部准教授	ときめいと
2017. 10. 8	小片保回顧展－その人と業績－　関連講演会	牛木辰男医学部長、山内春夫新潟大学名誉教授、加藤克知長崎大学名誉教授、小片守鹿児島大学大学院教授	医学部有壬記念館
2018.1.15	井上信道氏制作のブロンズ像「横浜のひと」寄贈記念講演会	大野静子（井上信道氏ご息女・美術家）、郷 晃教育学部教授	医歯学図書館 マルチメディアホール

●ギャラリートーク・体験教室・関連イベント

日　　時	タイトル	講　師	関連展示
2017. 5. 20	ギャラリートーク	志賀隆教育学部准教授	植物標本のタネは地域の自然を救う!?　時を越えて発芽する　植物標本のタネ
2017. 7. 9	ギャラリートーク	橋本博文人文学部教授	陵墓を考える展
2017. 7. 15	ギャラリートーク	橋本博文人文学部教授	戦争を考える2017
2017. 10. 14,15	キャンドルナイトin旭町		
2017. 10. 15	素謡と平家琵琶の夕べ	荻美津夫新潟大学名誉教授 鈴木孝庸新潟大学名誉教授	
2018. 3. 24	ギャラリートーク	金子千夏（経済学部２年生）	学校町界隈 放課後マチあるき特別写真展

●友の会行事

日　　時	テーマ	講　師
2017. 6. 3	第15回新潟大学あさひまち展示館友の会　総会	
2017.11.25～11.27	研修旅行（京都国立博物館、纏向遺跡などを見学）	橋本博文人文学部教授

あさひまち展示館入館状況

●入館者数

（2017年4月～2018年3月）

月	学内		学外			計
	学生	教職員	学生	教員研究者	一般	
4月	6	36	3	20	95	160
5月	8	30	14	22	111	185
6月	42	45	15	21	109	232
7月	97	32	25	77	235	466
8月	16	29	40	19	166	270
9月	22	33	6	19	105	185
10月	40	44	37	40	255	416
11月	25	31	21	24	131	232
12月	25	38	7	19	157	246
2018年1月	31	35	2	30	142	240
2月	16	32	4	18	112	182
3月	29	31	2	53	203	318
計	357	416	176	362	1,821	3,132

※開館日：水・木・金・土・日曜日の週5日間

●団体入館者

日付	団体名	人数
2017年5月11日	新潟大学附属特別支援学校	12
2017年5月14日	新潟市東区市民劇団「座・未来」	15
2017年6月7日	関川村立関川中学校2年生	5
2017年6月23日	新潟市立白新中学校1年生	8
2017年7月14日	新潟県立村上中等教育学校3年生	8
2017年10月6日	新発田市立本丸中学校1年生	21
2017年11月25日	福島県金山町立金山小学校1年生	17

●団体入館者

日付	講義・実習名	人数
2017年7月6日	新潟大学附属特別支援学校清掃活動	3
2017年7月15日	地学実験A・B/ 理学部	23
2017年7月17日	考古学概説A/ 人文学部	20
2017年6月14日～8月6日	平和学（見学レポート課題）	150
通年	博物館見学実習	50

新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター

あさひまち 第16号

■ISSN 2185-7431
■発行年月日　2018年6月14日
■編集・発行　〒950-8122 新潟市中央区旭町通2番町746
新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館
■印　　刷　富士印刷株式会社

編集後記

平成30年1月末をもって、14年間館長を務めた橋本博文教授が任期を終えられました。そのアイデアと行動力で、展示館が発展し、展示がよりよいものになるよう常に尽力くださいました。橋本前館長のもとに結成されたボランティア友の会会員は現在41人となり、展示館の活動に多大なご協力をいただいています。このたび郷晃新館長を迎え、地域に開かれた新潟大学の展示施設として、新たな試みも加えつつ活動していきたいと思います。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。